



TITLE:

京都帝國大學經濟學部紀要の刊行について

AUTHOR(S):

本庄, 榮治郎

CITATION:

本庄, 榮治郎. 京都帝國大學經濟學部紀要の刊行について. 經濟論叢
1926, 22(4): 706-708

ISSUE DATE:

1926-04-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128385>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 四 第

卷二十二第

行發日一月四年五十正大

論 叢

動物界の食糧問題……………教 授 川村多實二

國際課税けるお人及び證券の所在……………法學博士 神戶 正雄

勞農露國における勞働義務……………教 授 末 川 博

作州の農民騷動……………經濟學士 黑 正 巖

世界經濟の成立過程……………法學士 作田 莊 一

時 論

自作農維持策としての地租免除……………法學博士 河田 嗣 郎

講 演

木綿工業經營の現状一斑……………商學士 井 上 潔

雜 錄

總計豫算と純計豫算……………法學士 汐 見 三 郎

妙心寺の無盡講……………經濟學士 中川與之助

京都帝國大學經濟學部紀要の刊行について……………經濟學博士 本庄榮治郎

貿易をなし、僅かに和蘭を通して泰西の學問が輸入せられたに過ぎなかつた。然るに明治維新以後に至つては、事情之れと相反して廣く國を開いて歐米各國と交際することが原則となり、舊弊打破泰西文化の輸入といふことが、我國の國是となるに至つた。乃ち開國の機運を開きし亞米利加を始めとし、同文の英國はもとより、佛國獨逸の學術思想も輸入せられたが、このことは自然科學についても、社會科學についても同様である。かくの如くにして先づ泰西文化の輸入が始まり、次に之を咀嚼玩味し我國在來の文化に同化せしめて、我國今日の文化の發達を見るに至つたものである。

京都帝國大學經濟學部紀要 の刊行について

本庄榮治郎

我國は徳川時代に於ては原則として國を鎖して外國と交際せず、たゞ例外として和蘭支那と

今日吾々の研究の對象となつて居る經濟學についても、事情は全く同様である。勿論徳川時代に於て既に當時の學者は種々經濟上の意見を發表してをり、又蘭學者たる經濟學者の中には西洋思想の影響を受けたりと考へらるゝ學者もないではないが、それ等學者の論する所は何れも斷片的の時務論であつて系統立てる經濟學の知識たるべきものではなかつた。^{*}この經濟學の

* 拙著、經濟史研究、51頁以下

系統的知識は維新以後に至つて西洋より輸入された所であつて、先づ英米の書によつて一般に紹介せられ、ついで佛國の經濟書、獨逸の經濟書も盛んに輸入せらるゝことゝなつた。^{*}かくて明治の前半に於ては我國の經濟學界は大體翻譯時代であつて、西洋の經濟思想を輸入紹介するに過ぎなかつたものであるが、その後半に於ては、かくの如き翻譯的輸入に満足せず、西洋の學說を十分に批判し論究するのみならず、我國の事情や歴史を考慮して、獨自の研究を盡すことゝなり、最近に至つては一層の發達を遂げ、經濟學に於ける日本學派の樹立を期せんとするに至つて居る。

從來我國において發表せられた自然科學及び社會科學上の研究については、學術の發達に寄與し、人知の増進に貢獻するに足るものが決して少くはなかつたのであるが、それ等の多くのものは邦語を以て記述せられたため、普く歐米の學界に紹介せられざるの憾が少くはなかつた。尤自然科學の方面に於ては單行の著述や、各大學の紀要、學會の報告、其他歐文の出版物が、從來多少存在して、幾分この欠典を補ふ事

に足りしことゝ思はるゝが、社會科學殊に經濟學に關してはかくの如き歐文の出版物は殆んど皆無なりと稱して差支なきが如き狀態であり、ために我國の經濟學界の實狀は少しも歐米に知られをらざりし如き感があつた。斯くの如きは知的協力の精神より觀て大に遺憾とする所といはざるを得ない。若し經濟學に關係ある各大學、諸學會等に於て、歐文の出版物が續々あらはるゝに至らば、この欠陥は償はるゝに至るであらう。今回我が京都帝國大學經濟學部に於て紀要を發刊するに至つたのは、全く右の欠陥を幾分なりとも補はんとするの微意に出でゝ居る。

右の紀要は原則として本學經濟學部教授助教、講師等の研究を歐文を以て發表するの機關である。然し發刊の度數頁數等に制限あるがため（當分年二回刊行、各冊菊判約百五十頁の豫定）吾人の研究の業績中、その重要なものについて、それを悉く網羅することは不可能であり、僅かにその一部のみを收載し得るに過ぎないことは頗る遺憾であるが、然し所掲論文は

^{*} 拙著、増訂出版經濟史考、31頁以下

^{**} Kyoto University Economic Review (Memoirs of the Department of Economics in the Imperial University of Kyoto)

可なり多くの方面に亘つてをり、又一般研究に屬するものあり、或は特殊研究に屬するものあり、又委曲を盡せるものあり、或は研究結果の概要のみを掲げたるに止まるものもあつて、種々なる研究が發表されて居る次第であるから、これによつて吾人の研究の大體の傾向は十分に窺ひ得ることと思ふ。

最近帝國學士院は「帝國學士院記事」*を刊行し、また新聞紙の傳ふる所によれば九州帝國大學法文學部に於ても歐文雜誌刊行の計畫がある由であるが、經濟學に關する限りに於ては、わが紀要是恐らくは本邦における最初の計畫であらう。従て種々なる點に於て不備なる所があるであらうが、それは追て整備して、他日の完璧を期することゝしたい。

紀要第一卷第一號は目下印刷中に屬し四月下旬には配本し得る豫定である。收載の論文及び彙報は大體次の如くである。

田島教授 新條剩價値説及び社會階級協和論
神戸教授 奢侈費稅の提案及び其長所短所
財部教授 本邦自殺の男女別
向上教授 マルクスの所謂社會意識形態について

山本教授 今後の植民政策の基準
河田教授 我國及び朝鮮の小作制度
本庄教授 我國經濟發達の特質
小島教授 運賃論より見たる海運同盟
作田助教授 金紙幣本位制
汐見助教授 物價指數の研究
兼報 京都帝國大學經濟學部及び京都帝國大學經濟學會の沿革及び現状

要するにわが紀要の刊行は我が經濟學界を歐米の學界に紹介せんとするにある。其事業は全く學術的であり、世界的である。これによつて多少なりとも世界の學界に貢獻し得るならば、吾人の欣快、之れに過ぐるものはない。また若しわが紀要の刊行が我國の學界を刺激して、今後各方面に於て同様の計畫があらはるゝならば、それによつて我國の學界を正當に外國に理會せしめ、世界の學界に貢獻し得る所は一層大なるものがあるに至るであらう。吾人の舉が必ず意義ある結果を齎さんことは、深く自ら信ずる次第である。

(備考) わが紀要は廣く歐米の各大學、學會、研究所等に寄贈する豫定であるが、猶一部は丸善株式會社をして内外に對して販賣せしむる筈である。購讀希望者は豫め同社に申込まれたい。